

昭和14年7月1日（土）

曇り。小学一年男女、龍王へ遠足。此の朝中島主事臨局。茶を嚙み飯る。電報新宿より来る。五時帰宅。貢氏より速達。本日出発の旨、記載あり。道子病気、八日に延期通告の由。髯剃り柳原先生かかり赴く。飯宅十一時四十分。年金三円受取る。

昭和14年7月2日（日）

晴れ、午前六時半出発。高等学校前下車、神宮皇学院に至り、朝の行事に余会す。柳原先生、奥様、長女参集。八時より丈術の講義、末永老人71を島井氏の紹介にて説明、次いで二名の師範??にて実演。九時辞去。市場より鰯を求め十時飯宅。途中墓場の附近にて新聞紙破損、鰯、池に委（まか）し当惑す。久子休日。彼も亦鰯を求め来ると。39尾あり。

昭和14年7月3日（月）

曇り、朝食中、野辺良助来る。父危篤の電あり、中津と打合せ、今より中津に行くと。余飯を中途に面接、金二円貸しバス途まで送る。巖より葉書来たり、妹来て呉れ、和博と悦子とは愛子が連れて行くと云ふ。道子朝より臥床の儘。久子は早出。余右事情を通告、速達にて発送せり。此の日夕方より降雨。久子飯り、チューインガム三箇余に売り付く。

昭和14年7月4日（火）

夜来降雨、殆ど終日降り続く。昨夜貢より電報。本朝中津より追尾、35徴収せらる。桜にて出発、明日午前中着。公務を帯び来着の由。更に午後二時十六分着。「オンチ

ニコウムデキタヨテイニタツミツグ」と道子宛電報あり。道子は昨日より臥床の儘、起き上がらず。澄子蒲団調製中途にして放置してありしを、隣家に持込み調製。猶自分のは二階に於いて作製したり。夜は涼し。

昭和14年7月5日（水）

此の朝髯剃り貢氏の為に駅まで出掛ける準備中、八時頃佐世保発チチキトクスグコイの電報、中津再送にて到着。貢氏迎いの仕度が佐世保行きに変更。急行は十時十八分博多着、次の普通列車まで常に待たされし経験に鑑み、十時十分出発、十時二十分駅着、急行車は既に発車後、普通車を待つ。十一時十五分到着の普通車中に貢氏居らず。電報にてミツグシニアワヌイカンナガラタツ、チチ、に18依頼、長崎行き急行に投ず。十一時四十七分発180、60、山口より準急。午後二時二十五分、佐世保着。一区4バスにて、二時四十分着。バスは家の角にて停留、近頃通路変更により非常に便利となる。水にて身体を払拭して三階の昌江の居間（神様の前）に至る。光子病人の右側に寄添へ、脱脂綿に水を注ぎ口を湿し居り。時々涙を拭ふ。病人意識なし、時々手を動かす。間歇的に太き溜息を洩らす。午後四時頃、原医師来診。午前中往診の際は注射せし由なるも、此の度は脈搏等を検診して立去る。女中なき為、家政婦を傭ひ居る。緑夫婦、米倉氏夫人等の外、春一夫婦も見ゆ。医の検診時眼球硬直し、全く死相を呈し居る。頃時より呼吸30、脈搏微弱、擬滞多く、六時十五分呼吸絶ゆ。松原氏も立会ふ。巖、山田一彦、緑の亭主の兄、文夫の嫁の里に、電報にて死去を通知す。巖より弔電、更に山田一彦よりも返電あり。江島（天理教教師、嘗てトメ病中、中津に見舞いたる人）

氏の尽力にて神式の準備成り、葬儀社よりも来たり、寝棺を準備、防臭を施す。家の店頭に一旒（いちりゅう）、霊前一旒、柩一对、其の他総て葬儀社より持込み、棺台15円、柩3円、幕二旒4、霊柩車6等、一式にて50円弱を、其の他焼き場15円、タクシー四台4、80等。文夫の家内の母堂来。此の夜消毒、棺に収め隣室の八畳に移す。夜、通夜。江島氏神詞を捧げ、午前二時過ぎ、同氏家内の母堂危篤の由にて、匆皇皈らる。余三時頃仮寝す。松原氏十二時頃一旦帰り、朝四時頃再び来らる。此の日数回、湯、水に浸かる。

昭和14年7月6日（木）

暑気漸く強し。朝電話を局にかけ、保険金即時払いに付き照会す。戸籍抄本、保険証書領収帳に死亡調書等を一括提出の要あり。市役所に至り二時間待ち合わす。猶午後に至らざれば出来ぬと云ふ。一旦皈り、更に午後一時出頭。二十分俟たせ、一時三十分漸く受取り保険課に至る。保険課は局より一丁余、山の手にあり、代人印持参せぬ為、皈り寿夫を遣る。四五円貸付けあり、夫れを差引き、猶430円程受取り来る。文夫に渡す。余受付けに廻り、春一と弔問客に應對す。余見物として20円出金す。寿夫は海軍需品部に勤務の為、海軍より柩一对寄贈あり。其の他、個人又は公人として見舞客多し。文夫、光子海軍病院に出入りする為、其の方面よりの商人同志の見舞金ありて、総計八九拾円を算せり。美松会社よりも柩一对、玖島銀行より雪洞（ぼんぼり）一对の寄贈にて、霊前は相当賑やかなり。午後四時より告別式。三拾余名来会、五時終了。五時三十分出棺。光子の兄、原川義次氏来たり、タクシーにて焼き場に送る。重油焼却

の由、一時間以内にて遺骨を拾ふて来る。余は留守居す。七時頃より酒宴初まる。余は其の席に参加せず、夕飯を下にて食べ外出。一時間にて眠れば、痔出血甚だし。湯殿にて洗ひ下帯も洗濯す。原川氏と寝る、十二時。

昭和14年7月7日（金）

晴れ、原川氏の指図にて海の物山の物整ふ。猶近所の子供に5銭位づつ菓子を与ふことにし、30袋準備、十日祭りを催行。江島氏の妻女の母、遂に昨未明死去の由。此日も0時30分より来邸。米倉氏と祭祇を行ひ、0時30分頃終了。次いで小宴を開き、松原氏、原川氏、文夫と共に米倉氏を主賓として昼食。余は酒執行の間列席。午後二時三十五分発列車にて出発予定にて、光子初め原川氏は、米倉氏に扨？徒（しと）して教会かか行行く。余も参詣すべき筈なるも、余り販宅遅るるを惧れ、二時出発。原川氏余の旅行鞆持ち、バス停留所まで送る。米倉氏、菊昭氏、光子も来る。一同に会釈して車中に入り、五分間にて駅着。少時俟つ。切符は180、鳥栖にて40分程待合わし六時前十一分発。六時三十四分博多駅着。此日支那事変二周年、正午戦没英霊に対し一分間黙禱、汽車弁は総て十二銭の日の丸なり。夫れでも相当売行きあり。梅干しと大根の煮物付き。或る女性は二個を平らげ、余の前の老人は小城羊羹一本を平らげ、女性と云ふは海員生活の妻女、30位。牛乳二本を飲み尽くし、弁当二本を摂取す。驚く健啖家なり。鳥栖にて門司行き数台増結す。福岡着六時三十五分。市内は各商店共休業、頗る寂寞の感あり。南新町より徒歩。貢氏、糸島郡福吉に至り、此の日一泊するかも知れずと云ふ。余夕食に梅干しにて鯛の団子残り、猶腐敗せず余の来る

を俟つ如し、之を頂く。道子も粥食を摂る。久子店員と海水浴、箱崎浜にて遊び、七時半頃飯り、同じく夕食を、何も副食物なしとて不平顔ながら摂る。海苔味付けを出せし如し。

昭和14年7月8日（土）

快晴、一昨日来急に暑気加わる。佐世保にては扇風機ありて、割合に凌ぎ良かりし。此の朝は涼し、寝巻出し打ち掛けたり。貢氏十二時過ぎ来着、此の間下帯洗濯す。談問題の核心に入る。美和氏の手紙を出して階下に行き、道子と話し二階に来たらず。四時のニュースを聴き水浴、二階に上がる。五時入浴に外出、午後六時一緒に夕餉の膳に向かう。七時道子と外出。澄子無理になると心配して居る。余は八時少し前出発、二十分星野医院に到着。此の時、既に柳原先生に依り行事開始。松尾、栗原、森、全員五名に過ぎず。時局談、吉川英治の宮本武蔵の批評等。十一時星野先生見え、間もなく退散。十一時半飯宅。久子飯り来たり、皆起きて居る。水浴後、二階にて寝る。

昭和14年7月9日（日）

朝の掃除は、此日より日曜日に変更さる。五時二十分、澄子より二銭借用。電車半賃にて水鏡天満宮に至る。同志の女性の一人が既に掃除して居らる。余も加勢して働く。栗原氏、次いで城戸氏等見え、降雨の為ずぶ濡れとなるも厭わず。併し二十分以内にして歇む。六時半神前に額ずき飯宅。昨夜福永氏見えず。去る五日博多駅にて氏と偶然会見、八日の会合は欠席するかも知れぬから宜しくと、伝言を頼み、承知されつつ行って見れば案外欠

席。本朝の行事に柳原先生は不参加を表明されたるを承知しつつ、松尾氏遂に見えず。さて七時帰宅。朝食を単独にて認め、八時半貢氏と出発。九時に十五分前、駅着。道子バス立場まで送る。此の朝床上げす。昨日は三十三度、真夏の気温となる。今日は台風の御蔭にて風強し。其の為、余程凌ぎよし。昨八日野辺賢助氏より、四日午後五時、四郎氏逝去の報あり。振替にて三円香奠として贈る。貢氏、田舎より土産に夏蜜柑持来る。一籠頂く、猶当方よりも土産として、久子より一円余の菓子を持来さしむ。新聞紙求め、入場券入手。九時十七分発、車内に旅行鞆持込む。下帯洗濯、破損多きものを廃棄、修繕材料に資す。夜髯剃り、明日出発の準備す。十時寢床。

昭和14年7月10日（月）

三時起床、少々早きも起出づ。四時からシャツの釦を直す。五時十分出発。白ズボン白靴を穿きつ。白靴は昨夏見当たらず為、遂に穿かざりし。本年シーズン可なり底革痛み居る、資源の愛護の標語の手前、活用することとし穿きつ。久子より求めたるチューインガムを携帯。新聞紙4求め、乗込む。九時着。巖三時頃来局。余は野口氏を無断自家私用の為、公事を廃して使役する不都合を責む。何か弁解するも、毫も理由となすに足らず。反省の色なきを以て更に、佐世保に送りし書留郵便は封緘を漏らしあり、巖の慌て方の証左とも見らると謂へば、憤然として去る。彼の愚や度すべからず。五時過ぎ賑れば、机に凭りて仕事して居りし。彼は常なれば喜び迎ふるを、知らぬ振りして居る。余は「御前の家に居らぬつもりであったが、自ら憤（いきどお）ることは余の多年の修養に反するを知り、思い直して賑って来たが、御前の行動は

許し難い」と申して、自分の部家に引取りぬ。夕方詫びを入れる。暑さ烈し。ガム二ヶづつ永江、是永両氏に頒配す。

昭和14年7月11日（火）

朝少し曇り。巖に電報にて澄子を招致すべしと云ふ。永く野口氏を公務から私事に使役することの非を通告す。少時して巖来たり、人があった、後刻来ると云ふ。果たして三十四五の伯母さん来る。此の日は遣り方を教える関係もあり、明日より出勤を承諾して、局員に対しても人物があったと洩らす。然るに飯って見れば、其の伯母さんと云ふ人居らず。頭痛するとか云ふて、十時頃より飯宅せりと云ふにあり。仕事の多き予想外なるに驚愕せしものか。其の家を去って安住の地なき野口氏なればこそ、不得已居るも、自分の家が附近にある以上、逃避するは当然とも認むべし。此日裏より入り来る。風涼し。六拾円搾取を企むる者あり。清原鉄雄名義通帳検閲済み22銭現在を、六拾円と改竄（かいざん）せしものとす。余警察に刑事を訪ねて、逮捕手配。三十四銭にて金鳥蚊取り香を森下より求む。多忙の間にも風呂沸かす。両児を入れる。愛子は和博のみ連れて行き、悦子は残り居る。和博一人なるが、汽車中の子供連は難儀せしものなるべし。自分独りすら持て剩す。長途の旅行を偲びては、さて巖も気を揉み、電報にて出発日時間合わすべしと云ふも、夫れには及ばずと中止せしめ置く。但し明日は澄子を電報にて招致せん下心にてありし。

昭和14年7月12日（水）

曇り模様、朝少し雨降り出づ。長靴和傘にて出発。巖よ

り電報料余に渡す。之を受取り局に來たり打電せんとす。永江氏頻りに留む。要は是れまで多忙の間を切り抜け來たりしもの故、あと幾何もないのだから、頑張ると云ふに在り。そう言われて見ると其の通り故、諒承して電報を見合わす。少時して野口氏より電話、愛子十一日出発、十三日中津着とあり。葉書今到着と是れで一切解決。十一時頃より晴天となる。午後岩上刑事臨局、笹尾作市小為替拾五円事件依頼す。本日貯金支局に照会の返電、残高22銭の旨、來報あり。検閲16130亡失届出再度発行、爾來受渡しなし。岩上氏に其の旨通知す。笹尾問題判明の諸光ある旨、此の時通知あり。始末書を書く。水浴、葉書と云ふは良助の差出せしものなり。販宅は十三日なるも、自分は門司にて分かれ、直に巖、泉に販り中津に寄らずとあり。巖より貰ひし電報料返す。

昭和14年7月13日（木）

晴天、朝の間岩上刑事來局。販れば愛子販宅し居る。九日上田谷地、十日三谷、若松に行き、??子と墓參、十一日夜行出発、今朝九時着の由。入浴、上田谷地より芋の莖、青豆及び糯米等貰ひ來たり。等分して余にも送らんとす。青豆や芋の莖等は余のみ食べ、誰も食はぬ。糯米は重量嵩にて、別にラジオ修理を要し、是亦携行を要する關係を以て、之を断る。

昭和14年7月14日（金）

晴天。智子発熱、八カ間敷く氣むづかし。愛子少時負ふ。余出局前、守りす。下熱眠る。野口氏出局、十一日間休暇の姿。岩上刑事來、是永氏顛末書同氏代書、持行く。此の朝巖をして、永江氏是永氏に各二円づつ謝礼せしむ。

六時頃販宅。巖一旦販宅後出発の由にて、販宅し居らず。四円の謝礼に対し、決して多額に非ざる旨、懇諭す。愛子は其の問題には触れず。皆様に御迷惑になって済まぬとのみ述べ居る。遠（さす）がに利巧者なり。

昭和14年7月15日（土）

朝靄かかる。昨夜梱包せし土産物を愛子持来たりたるも、曩に通告せし如く重量のものは持てぬと断り、ワサビ漬け及び薇（ぜんまい）干しを貰ふこととし、野口氏をして先に局まで運ばしむ。白靴の底、昨出局時底革剥離、夫れを拾ふて此の朝修理せしむ。底金を当てたる為14銭にて済む。永江氏切手請求。午後一時二十分出発。永江氏駅まで荷物を搬び呉る。四時三十五分、定時着。電車及びバスにて五時前販宅す。髯剃り七時四十分出発。柳原先生より案内状到着なきも行きたり。会場の手前、六畳の部屋に数名の人々見ゆ。今夜は藤崎、山崎、両氏戦地より負傷して帰還、夫れの歓迎茶話会を開き、例会をやめたるも、来る人は迎ふる趣旨にて、敢えて通知を發せざりしと。藤崎氏は前西陣町局長の弟、山崎氏は原田局長の子息なるべし。両氏の外、猶西南学院出身者二名あり。後刻森氏来たり、席に連なる。十一時一同と辞去。森氏の咄に山崎氏頗る重態なりと。暫く見舞わざりし故、明日見舞ふこととす。

昭和14年7月16日（日）

午後二時より外出。余の手紙開封の形迹あり。ラジオ持ち上西町に停車場廻りにて行き、販りに玉屋にてクラブ歯磨きを求めんとしたるもなし。松屋にて発見15銭と云ふ。ライオンは20銭なり、然るに如何なる行違いか、ライオ

ンを求め来る。帳繖?打抜器25、錐25を求め、販り途、山崎氏を訪ふ。面会謝絶と思ひしに、一寸面会すと謂はる。二十分間計り話す。色々悲観的口吻なり。之を励まし来る。食事は流動物のみ、葡萄糖及びABC等の注射にて一日を支へ居る如きも、顔色は赤味を呈し、気魄憔悴の態を露呈せず。当分持続するものと思はる。武蔵温泉の山奥に避暑、静療せばやと思惟する旨、語らる。余賛し置けり。不思議に痛みなき由。亡井上氏は同じ癌ながら痛み激烈と聞く。四時過ぎバスにて販宅。二郎よりの手紙には、佐世保に五円見舞いし電報もやりしとあり。

昭和14年7月17日（月）

午前中はさ程でなかりしも、午後より西北の風強し。二階で裸体にて居る。武藤秀夫より赤児産まれたる由、久子に通知ありしなるべし。久子本日も遅出。今日の新聞にて、十五日は土用入り及び盆会とも。富士登山客数万、近年になき大衆、四才の女兒及び七十三歳の老人に至る。蜒蜿白衣一線、洵（まこと）に盛況を呈せりとあり。此の日は外出を見合わす。早く寝に就く。

昭和14年7月18日（火）九時より外出。先づ郵便局にて年金。十一日期限の七月分を三円受取り、其の儘、新柳町より電車に乗り因幡町下車。市役所に至り、国税の表札に至り土地附有証明を受く。30銭料金金庫に支払ふ。次いで県庁前より電車に、西町下車。松下無線出張所に至り、ラジオを受取る。修理箇所は真空缶一ヶとあり。西町にて電車に、呉服町乗換駅に、夫れより更に一区南新町に、更にバスにて自宅へ。かくして水浴、手紙を書き、八時蚊帳を吊らんと思ひし時、広美より電報あり。本

夜来ると、尤もユキタシとある故、返事を要求し居る如きも、時間外とて返事はだせぬと云ふ。余は電話にて返事せんとしたるも、局に居らぬとすれば、夫れも無効だ。遂に何れも中止す。夜九時四十分、広美来る。仕官47円、若松局在勤を被命。朝鮮行きも見合わせねばならぬこととなる。子供等と風呂に行き、十一時返り寝床。村田氏、先日高崎氏と結婚せりと。林局長媒介者となる。唯百日立たずに、亡妻が家の軒を離れぬ間に新妻を貰ふとは、批難ある由。十一時半寝床。

電信電話事務開始、熊遞管内で三十局（大朝）

熊本遞局信管内の電話加入区域内における電信および電話の未設局が目下百三局あるが、急不急に応じて本年度は左記三十局に電信および電話通話事務が開始される旨熊遞局規画課より発表があった

直方古町（福岡）伊田三井炭鉱（福岡）後藤寺平松（福岡）甘木東町（福岡）東吉富（福岡）唐津浜町（佐賀）鏡山（佐賀）唐津大島（佐賀）鳥栖駅前（佐賀）島原江戸町（長崎）南諫早（長崎）植柳（熊本）人吉駅通（熊本）林温泉（熊本）水俣旭町（熊本）熊入（熊本）中津駅前（大分）中津一ツ松（大分）日田豆田（大分）光岡（大分）佐伯大手前（大分）鶴岡（大分）呉崎（大分）判田（大分）川内町駅前（鹿児島）串木野浜町（鹿児島）那覇上泉町（沖縄）那覇泊（沖縄）那覇垣花（沖縄）那覇通堂町（沖縄）、括弧内は局所在県名

昭和14年7月19日（水）

晴れ、風あり。十一時近く道子と飯飯。或るデパートに

て昼飯を馳走して、バス、駅まで見送りし由。昨新聞、中津駅前には本年度の計画として、電信電話開始せらるる由。未開始百三局中、三十局は本年度に開始、中津一つ松も同様、年度内に開始の筈。広美任官の件、二郎に通知せり。

昭和14年7月20日（木）

晴れ、降雨なき為、田植え不能。600町歩に上るらしく、炭坑水揚げポンプ、ガソリン防火ポンプ等持出し、応急措置するも間に合わず。更に200台揚水機を購入、配給する由。雨乞い初まる。

昭和14年7月21日（金）

朝食を済ましたるか、皆外出。海水浴に百道に行きたるらし。「まこと」誌自転車にて配達受く。光友桑原氏より京都より送越さる。大原より二郎結婚届送付越せり。書式不備と思はるも、此の儘発送取計らいたり。澄子等十時過ぎ販宅。午後曇り、降雨近付きし感あり。駒次に、愛子行き土産貰ひたる礼状を認む。聞く処に依れば、千枝子夫婦は自宅より通勤し居り。千枝子は二人目の子供、産みたる由。此度は御金の問題に触れず、今日土用入り。学校休み。

昭和14年7月22日（土）

薄曇り、空は夏の儘持越し、今日は幾分か曇り。午後よりは再び前日通り、薄曇り。イギリス、クレーギー大使と有田外相と、第三回会談に（十五日第一回、十九日第二回、二十一日第三回）三原則の協定事項

- 一、イギリスは支那に於ける現実の事態を確認する
- 二、イギリスは支那に於いて日本軍の生存上並びに治安維持について日本を害し支那を利するか如き行為をなさざること
- 三、イギリス政府は今後支那に於いて以上の行動を行わざることを在支イギリス官憲に徹底せしめる

二時頃より降雨、初めは細雨、次第に本降りとなる。夜に至って甚だし。終夜降り続く。農家蘇生、田植え不能の方面、一斉に田植え始まる。

昭和14年7月23日（日）

降雨、午前中雷鳴と共に可なり多量あり。午後より霽れ、風涼し。午前中剃刀研ぎ、理髪して貰ふ。碧空次第に拡がる。明日の準備す。

来る二十八日に火星が十五年振りに地球に近付く。其の距離5800萬キロ。火星の一日は24時間37分余（自転）で、昼と夜があり、一年は687日（公転）で春夏秋冬も訪れる。空気や水があり気圧は60ミリ。地球の上空18キロの上層に相当し、地上は可なり寒く、気温は摂氏20度から零下15度位。下等動物が居るらしいと云ふが、最近の学説です。北半球には運河様のものが発達しているといはれている。

夕食後、回数券を求めるべく仕度にかかる。久子買ってやると云ふ。澄子に参円借りて、久子に二十二円渡し、外に電車券代十銭を与ふ。隣家の娘さん来る。十時寝床、ラジオ聴きつつ睡る。

昭和14年7月24日（月）

四時少し前起床。体操を除き平常通り行事を済まし、昨夜の残飯を喫し、五時二十分発。ラジオ機携行、電車路まで徒歩拾分間、既に汗ばむ。半額電車三十五分駅着。新聞紙4銭求む。此日曇り、中津まで割合熱さに辟易せざりし。六時販り入浴。

昭和14年7月25日（火）

便覧十三回及び十四回、及び同附録官署名録、庶務会計篇、各訂正書到着。三尺の高さあり。直に訂正に着手したるも、一日にては終了し能わず。明日に持越す。電話及び電信事務開始に伴ふ人員の配置に付き、考慮し居る際、野口氏より話あり。愛子に相談し居る処、野口氏も来たり、再び同氏の友達を招くことにせり。即ち手紙を出し照会し呉ることになれり。

昭和14年7月26日（水）

猛暑、訂正書挿換え完了。給料、午後伝票払い証票着、交付。麻生氏見ゆ。窓口まで来て販るに二郎よりの手紙。福岡より送付越しあり。是非来仙を請ふとあり。汽車二等寝台付き券を送るとか、東京仙台間飛行機利用も可ならん。乗込み券送るとか書き記されあり。之を見るに一応は尤もらしいが、切符は逆コースを売る筈なし。巧言令色と知りつつも、悪く思ふ必要もなければ、其の儘葬る。巖に手紙を見せしに、仙台に行くなら自分も何程か差上げんと申出づ。巖の方が真実なるも、瘦せ我慢たるは之を認む。余は之に対し、そんな処に力瘤を入れるべきものに非ずと諭しぬ。貢氏曩に七十五円になる由、余に咄せしが、実現したるやに通知あり。風多少あり。大掃除

検査日、畳乾燥塵埃を叩き落とす。其の余波、局内にも影響、机上塵砂堆し。市役所より係官来たり、局、私宅の掃除不励行を難詰す。奥さん日曜にやると云ふ。此日入浴。

昭和14年7月27日（木）

庶務会計編及び本日着、局報略号表訂正二号を完了す。永江氏切手請求。夜防空予行演習、消燈せるも明月、戸外に涼を納るるもの多し。愛子買物に外出。和博等昼寝せしものか、十時頃まで起きて居る。永江氏自分の家に移りたき由、野口に話せる由。

昭和14年7月28日（金）

去る二十六日、別府に書留通常不著、照会に対し差出人より未だ返事来ぬかと詰問す。余釈明に努む。稍興奮の嫌いあり。此日終日快々（おうおう）たり。未だ修養の足らざるを痛感す。秋永鶴居局長臨局。ラジオ申込、60件確得方に付き話あり。巖に通告す。入浴。即ち数丈け局の成績にすれば、申込み料は局にて受取らぬもよしと云ふことなり。

昭和14年7月29日（土）

午前六時二十分、防空演習開始。巖加入申込み書一件、余に交付、放送局に発送す。清原鉄雄被疑事件証拠物件、検事局より送付越しあり。午後一時二十分出発、五時前着。二十五日付き、二郎よりの手紙を見るに、静江は賢夫人なりと称し居れり。夫婦は一体と云ふから、妻を賢人と云ふのは、俺は賢明なりと自慢するに当たる、是れより滑稽なことなし。妹等が静江を女給だとか色々

批難したと云ふ。是れも批難に値する行動が絶無だったか、反省する必要がある。手紙は総て妻に披見せしめ、夫婦一体を強調の証拠とするが、公事を私事と混淆する嫌いなきか、余は総て異議あり。此日より本格的燈火管制に入る。蚊帳を階下にて吊り、頗る皺にせられたり。澄子自分等の蚊帳は、蚊が這入ると云ふ。嘘も方便の類か。早く床に入り、ラジオ聴きつつ寝る。

昭和14年7月30日（日）

黙?火出来ぬ、少々暗きも水浴す。新聞二日分見る。寢床代用莫産縁り破れ初む。早く修理せねば大破の基となる恐れあり。九時頃より修繕を初む。一時間余を費やす。申又洗濯す、半日午後五時迄に乾燥す。道子防空演習に出陣す。三時間ばかりの活動に、大いに尻古??垂れたるらし。夜は燈火管制、青色電燈を点火、蠟燭を点しなどし居る。九時過ぎ寢床。

昭和14年7月31日（月）

二郎よりの手紙に、上田谷地、三谷の伯母さんを東山に招待して一泊せしめ、御馳走して自動車にて販宅せしめたる由。日附けの明示なき為、何日頃か知らぬ。午後三時十日振りにて髯剃り、三十分郵便局に至り年金六円受取り、光友会費拾六円五拾錢預金す。二郎より結婚届不備の点ありしやにて、再び回送越したり。證人二名連署を要すと、文夫と巖を選定。有り合わせ印にて押して呉れとあり。そこで其の通りして二郎に返す。昭和十二年四月四日、届出は遡及することとなる為、受理せぬと思ふと書き遣る。4錢切手参枚封入越せり。防空演習は午前中にて終了、道子も正午還る、馬穴を持って・・・午

後七時頃より風可なり強く、余程涼し。澄子トマト買ひに郵便局附近まで来たり居る。恰度余が局より帰るさ、偶然出遭ふ。例の野菜屋は今回召集、旗数旒、樹ちあり。西瓜多数あるもトマトはなし。北野純一氏より先日味海苔贈与に対し、礼状出す。松尾辰蔵氏に対しても、来週来られぬかも知れぬ柳原先生に、例の拾円贈呈方、葉書で委嘱す。夜ラジオ聴きつつ睡る。夜半スイッチ入れあるを認め、惶（おそ）れて断つ。夜の水浴、気温低下、薄冷を覚ゆ。